幼児期の子どもにおける音楽と絵画の関係性についての一考察

栗　本　浩　二・落　合　知　美

A Consideration about the Relationship of Music and the Picture in the Infant Child

KURIMOTO Kouji, OCHIAI Tomomi

キーワード：音楽、絵画、幼児

Ⅰ．研究の背景と目的

幼児期の子どもの描く絵は興味深い。考えたことや楽しかったことが、思いもよらない表現で描かれている。そのような絵画に接していると子どもたちは小さな芸術家に見えてくる。幼児の独特な絵画表現の研究は多くあるが、なかでもリュケ（1927）は、子どもの絵は見えるままに描く「視覚的リアリズム」と、知っていることを描く「知的リアリズム」に区別した。知的リアリズムは、幼児の４歳から７歳ころまでの絵画表現であり、例えば、バスを描くとき、バスの形（視覚）より、乗っている人（知っていること）に関心があることが多く、視覚的には見えないはずの人の姿を描いたりする。絵の中の固有色や物の比率などが、実際に見えているものと異なりイメージ力が優先される表現である。

このように幼児期の表現は、成人とは異なる独特な表現があり、このような表現を支えているものの一つに幼児期特有の感性がある。感性は、外界の刺激に応じて感覚・知覚を生じる感覚器官の感受性であり、感覚によって支配される体験である。したがって、感覚に伴う感情や衝動・欲望をも含む。理性・意思によって制御されるべき感覚的欲望または思惟の素材となる感覚的認識である。幼児期の心の生活は、知的リアリズムである感性的な側面が大きな役割を担っている。

保育所保育指針・幼稚園教育要領の５領域の中の「表現」では、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」とされている。このような表現領域に係る活動は、音楽や造形・絵画的表現、身体的表現、言語的表現、さらには、それらの諸要素を統合した相互的表現活動など、さまざまである。そこで本研究は子どもの感性が、音楽を聴きながら絵を描くという行為によって、どのような表現として立ち現れてくるのか、音楽が子どもの絵画表現に及ぼす内面的世界の諸傾向と特徴について考察することを目的とする。

Ⅱ．調査

１．実施内容

2016 年 12 月、M保育園においてドードリング（注１）の一部の技法を使って調査を行った。88 × 62.5cmの模造紙２枚を繋ぎ合わせ 176 × 125cm の長方形用紙を作成し年少児 12 名ずつ４グループで製作した。描画材料は、「サクラクレパスふとまき 24 色」を各グループ７セット用意し自由に使用し製作した。３分間曲を流し、その時間で自由に製作することとした。

２．調査対象

調査は３歳児 12 名を一グループとし、A グループ、B グループ、C グループ、D グループで実

施した。製作した絵画20枚（４グループがそれぞれ５枚製作）を考察対象とした。

３．調査内容

①定められた５曲を聴きながら、描画材料（クレヨン）を使って自由に絵を描く。

②一曲につき一絵画の製作とし３分間曲を聴きながら描く。

③一絵画の製作は３歳児12人のグループで行う。

４．分析方法

調査対象の５曲の特徴を①曲の速度とテンポの傾向、②曲の音色の傾向、③曲調の傾向とし、音楽を聴いて製作された絵画の特徴を①色彩の傾向、②点、線、面による抽象的表現傾向、③具体的な形態による表現傾向として抽出し、それらの相関関係について考察する。

５．調査前の説明

活動が始まる前に曲を聴いて絵が描ける環境を作り、自由に絵を描くことを伝えた。曲についての説明は一切行わないが、流れている曲をよく聴くように話をした。また、曲を聴く時間は、子どもの集中力が持続できる時間と５枚の絵画製作を考慮し３分間とし、曲を聴きながら製作することを伝えた。製作活動が終了した時に曲目と作曲者の説明を行った。

６．　曲の選択理由

絵画と音楽に関する調査をするにあたり、筆者の音楽の知見に基づく以下の５曲を用いた感覚表現手法の提案をした。

（１）　Ｗ・Ａ・モーツァルト作曲：「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」Ｋ　ｖ525第１楽章

近年、モーツァルトの音楽は、癒しの音楽として、様々な場所で使われている。モーツァルトの音楽を、聴覚セラピーの音素材として最初に導入したアルフレッド・トマティス博士は耳鼻咽喉科の医師として、モーツァルトの楽曲を用いて、数々の有益な聴覚セラピー研究を行った[2)]。又鶴岡政子[3)]らの研究によると、モーツァルトの音楽を聴きながら歩行すると、歩行中の体重心ゆらぎのパワースペクトルは、1/fゆらぎに近づくと立証された。本研究では、モーツァルトがウィーン時代に作曲した数ある曲の中でも世に知られた曲である「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」を、選択曲の１曲として用いた。幼児期の子どもは、規則性と不規則性の絶妙なバランスを持ったこのモーツァルトの曲を聴き、絵画での表現はどのように醸し出すのかを探った。

（２）　エリック・サティ作曲：「ジュ・トゥ・ヴ」

エリック・サティの音楽の作風は、厳密な調性からはずれた自由な作風である。「ジュ・トゥ・ヴ」は、歌曲であるが、サティ自身が歌詞にメロディを付けて作曲している。３拍子であり、ここでは敢えて歌詞付きの曲のピアノのみの楽曲を使用した。この曲は、1900年サティが最盛期の楽曲であり、調性を崩した“家具の音楽”としての要素が色濃く出ている作品である。子どもにとって、現在の環境音楽の基とも言えるサティの楽曲で、絵画としての表出はどのようであるかを探った。

（３）　アストル・ピアソラ作曲：「リベルタンゴ」

タンゴは、アルゼンチンの伝統舞踊であり、ピアソラがクラッシック・ジャズの素養を基に、「リベルタンゴ」を作曲した。この曲は、バンドネオンとチェロで演奏され、激しいリズムと憂いを持ったメロディが特徴的である。子どもにとっては、まだ憂いという概念が存在しないのではなかろうか。だとしたら、この楽曲を聞いて、脳や身体から湧き出る感覚が存在するのか否かを、この曲を用いて検証することとしたい。

（４）－１　宇野誠一郎作曲：「アイアイ」

ハ長調4/4拍子の童謡であり、被験者である園児は、必ず知っている曲である。歌詞に繰り返しや、オノマトペがある。近年の乳児研究では、乳児はこれを好むということが、わかってきた。

（４）－２　團伊玖磨作曲：「やぎさんゆうびん」

ヘ長調 4/4 拍子の童謡である。この曲も、被験者である園児は必ず知っていると思われるが、歌詞には繰り返しがなく只意味を理解して歌う楽しい曲となっている。上記の「アイアイ」と比べて、違いはあるのであろうか？

（5）キング・メンサー作曲：「ボン・アニヴェルセ」

西洋近代音楽分析の基礎となる、アフリカ音楽を用いて調査を行った。低音を奏でるドラムと、歌の旋律とのリズムは、異なったものとなっている。西洋のリズムに親しんでいる人間が、ポリリズムを聞いた時にどのような感覚を持つのであろうか。この曲は、アフリカ音楽である。通常アフリカ音楽はポリリズムで成り立っているので、故にこの曲が選択理由となった。

７．演奏した曲の順序

２回の調査を行い、１回目調査Ａ、Ｂグループの１曲目は、「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」、２曲目は「ジュ・トゥ・ヴ」、３曲目は「リベルタンゴ」、４曲目は「アイアイ・やぎさんゆうびん」、５曲目は「ボン・アニヴェルセ」とした。

２回目調査Ｃ、Ｄグループの１曲目は「ジュ・トゥ・ヴ」、２曲目は「アイアイ・やぎさんゆうびん」、３曲目は「リベルタンゴ」、４曲目は「ボン・アニヴェルセ」、５曲目は「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」とし、１回目調査と２回目調査は、曲の順番の入れ替えを行った。

８．調査に使用した曲と作者の解説

（1）Ｗ・Ａ・モーツァルト作曲：「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」Ｋ　ｖ 525 第１楽章

この曲は、モーツァルトの管弦楽曲の中で、最も有名な曲である。作曲されたのは、1787 年８月で、モーツァルトがオペラ「ドン・ジョバンニ」を書いていたときである。この曲が、何故このタイミングで書かれたのかは、定かになっていない。「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」は、ドイツ語で、「小夜曲」（セレナーデ）の意味である。

（2）エリック・サティ作曲：「ジュ・トゥ・ヴ」

この曲の作曲者・エリック・サティは、極めて異端な、変わった人物であった。作品のタイトルも、普通では考えられないような風変りなタイトルを付けたりする。このピアノ曲は、フランス語で「あなたが欲しい」という意味である。ワルツ調のシャンソンであり、ピアノ独奏版は、サティ自身によって作られた。

（3）アストル・ピアソラ作曲：「リベルタンゴ」

作曲者、アストル・ピアソラは、リベルタ（自由）とタンゴを合成し、この曲を作った。1974 年に発表されたこの作品は、作曲者ピアソラが、母国アルゼンチンに絶望し、イタリアに渡り演奏活動をしていた時代の作品である。

（4）－１　宇野誠一郎作曲：「アイアイ」
（4）－２　團伊玖磨作曲：「やぎさんゆうびん」

「アイアイ」は、1962（昭和 37）年に　ＮＨＫテレビ『うたのえほん』の挿入歌として発表された。アイアイはマダガスカル島固有種の猿であるが、“悪魔の使い”とも言われているが故に乱獲され、現在は絶滅の危機に瀕している。作詞者の相田裕美は、この猿を、かわいい姿として捉え、作詞した。「やぎさんゆうびん」は、1952（昭和 27）年に　ＮＨＫラジオ『うたのおばさん』で放送された。作詞者まど・みちおがこの詞を書いたのは 1929（昭和 14）年だが、機転がきいたこの詞に、團伊玖磨が後に曲を付けた。

（5）キング・メンサー作曲：「ボン・アニヴェルセ」

作曲者キング・メンサーは、アフリカのトーゴ共和国の作曲家兼プレイヤーであり、1996（平成８）年より、現在にわたり活躍している。日本にも、度々来日している。

この曲も、アフリカ音楽における独特の音律（音階上のピッチ）で歌われている。又、この強

烈なリズムは、人間の根源的な何かを感じずには
いられない。

Ⅲ．結果

１．幼児が音楽を聴いて製作した絵画

W・A・モーツァルト作曲：「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」K　v 525 第１楽章

Aグループ絵画

Bグループ絵画

Cグループ絵画

D グループ絵画

エリック・サティ作曲：「ジュ・トゥ・ヴ」

A グループ絵画

B グループ絵画

C グループ絵画

D グループ絵画

アストル・ピアソラ作曲：「リベルタンゴ」

A グループ絵画

B グループ絵画

C グループ絵画

D グループ絵画

宇野誠一郎作曲：「アイアイ」/ 團伊玖磨作曲：「やぎさんゆうびん」

A グループ絵画

B グループ絵画

C グループ絵画

D グループ絵画

キング・メンサー作曲：「ボン・アニヴェルセ」

A グループ絵画

B グループ絵画

C グループ絵画

Dグループ絵画

1．音楽を聴きながら絵画製作を行うことにより、音楽に誘発されて絵画に表出された特徴について

音楽と絵画に現れた諸傾向を、音楽は「曲の速度とテンポの傾向」、「曲調・曲想の傾向」「音色の傾向」とし、絵画では「色彩の傾向」、「点、線、面による抽象的表現傾向」、「具体的な形態による表現傾向」としてまとめる。

作曲家・曲名	曲	曲の特徴	絵画	絵画に表現された特徴
モーツァルト「アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク」	曲の速度とテンポの傾向	Allegro（軽快な）速度の4/4拍子である。冒頭のメロディが過ぎると、第２ヴァイオリンは、２拍ごとに、中低音の音を刻んでいく。その上には、常に艶やかなメロディが、表現されている。	色彩の傾向	全体を通して彩度の高い色彩が多く使われている。 赤色と青色が多く使用され、塗りつぶされている。 花の表現は多色が隣同士で混色せず表現されている。（Cグループ絵画）
	曲調・曲想の傾向	明るいさわやかな曲調である。曲名の通りの解釈であれば、小夜曲であり、決して壮大なイメージの楽曲ではない。がしかし、誰もが心に残る軽妙なメロディでできている。	点、線、面による抽象的表現傾向	長いストロークの線や、短いストロークが並行して描かれている線がある。（Aグループ絵画） 全体を通してスクリブルは一つの塊を描くような線がある。
	音色の傾向	純音からは逸脱した楽器（弦楽器）の倍音で構成された、輝かしい音である。	具体的な形態による表現傾向	人（Aグループ絵画）、花、金魚（Cグループ絵画） ハート（Bグループ絵画）
エリック・サティ「ジュ・トゥ・ヴ」	曲の速度とテンポの傾向	アウフタクトから入る３拍子の曲である。この曲は、本来歌の曲として作曲された。流れるような３拍子が、特徴となっている。	色彩の傾向	全体を通して赤色、青色、緑色、黒色が多く使われている。重なった有彩色は混ざり合っている。（Bグループ絵画）
	曲調・曲想の傾向	サティの音楽は、今日の環境音楽の基礎であり、BGM（バックグラウンド・ミュージック）的な要素を含んでいる。別名「家具の音楽」とも言われ、常にそこにあっても、邪魔にならない曲調である。	点、線、面による抽象的表現傾向	線には一定の単位による流れが規則的に描かれている。（Cグループ絵画） 比較的短い線のまとまったタッチが多く見受けられる。（Cグループ絵画） 手の動きの痕跡である円弧および、線描の勢いがある。
	音色の傾向	本来は、歌曲であったこの楽曲のピアノ部分を用い、より透明感のあるピアノの音色で、「家具の音楽」の意味合いを出した。	具体的な形態による表現傾向	人の顔（Dグループ絵画）
アストル・ピアソラ「リベルタンゴ」	曲の速度とテンポの傾向	全体的に、鋭いスタッカートを多用する。 ４拍子系で書かれるが、第１拍めと第３拍めに強烈なスタッカートを置き、更に滑らかにしたものが、この楽曲になる。男女の酒場での踊りに相応しいリズムとなっている。	色彩の傾向	すべてのグループに一部黒色が集中して使われている。黒は塗りつぶされた塊として画面から強い緊張感と線の躍動感がある。画面全体にのびやかで大胆に描かれている。強い筆圧で描かれた線の混ざり合いによる混色は、有彩色を伴い黒に近い色彩である。

アストル・ピアソラ「リベルタンゴ」	曲調・曲想の傾向	アルゼンチンタンゴのルーツは、貧しい港町で、イタリアやスペインの移民たちが暗い酒場でフラストレーションの捌け口で踊ったと言われる。そしてそれは、哀愁漂う、激しい曲調であることが多い。	点、線、面による抽象的表現傾向	長いストロークの線描と短く細かな円やハートの形が存在している。(B・Cグループ)
	音色の傾向	使用楽器は、憂いを表現するのに相応しい、バンドネオンである。	具体的な形態による表現傾向	人の顔（C・Dグループ）ハートの形が集団で描かれている。(Dグループ)
宇野誠一郎「アイアイ」伊久磨「やぎさんゆうびん」	曲の速度とテンポの傾向	4/4拍子であり、「アイアイ」は、多少テンポが速く、「やぎさんゆうびん」は、ゆったりとしたテンポである。	色彩の傾向	暖色系の色相が多く使われており、色数が多い。
	曲調・曲想の傾向	２曲とも童謡であるので、曲調は単純で明るい。「アイアイ」は、歌詞に繰り返しや、オノマトペがあり、乳児には、受け入れられやすい。 「やぎさんゆうびん」は、ゆったりとした、明るい曲調である。	点、線、面による抽象的表現傾向	線描に勢いがあり、全体的な動きが感じられる。画面全体に描かれており、余白が少ない。
	音色の傾向	うたのおねえさんの声と、小編成の楽器の演奏となっている。全面的にうたのおねえさんの、つやつやとした高い声が流れている。	具体的な形態による表現傾向	スクリブルな表現としてAグループの絵画は表現が多く描かれ、B、Dグループの絵画は曲線が多く描かれている。共通している形態として丸の痕跡が両絵画ともに表れている。皿、フォークらしきものが描かれている。
キング・メンサー「ボン・アニベルセ」	曲の速度とテンポの傾向	アフリカ音楽は、リズムが合ってないようなポリリズムである。であるが、この曲には、根底に田畑を耕す際の４拍子が流れており、その中で、ポリリズムを表現している。	色彩の傾向	茶色の色彩が多く、彩度の高い色の使用が少ない。 単色で描かれている箇所が多い。(Aグループ絵画) ４色（茶色、赤色、黄色、青色）に塗り分けられた短い棒状の形態。(Aグループ絵画)
	曲調・曲想の傾向	アフリカ音楽の明るさが、良く出ている。と同時に、南国ののんびりとした曲調となっている。	点、線、面による抽象的表現傾向	自由曲線で描かれた有彩色の線描に、並行するように異なった色の線が描かれている。(Cグループ絵画) 円弧の形に力強い直線が描かれている。(Bグループ絵画)
	音色の傾向	アフリカのトーゴ共和国出身の音楽家、キング・メンサーの伸び伸びとした声の音色である。アフリカ民族特有の男性の力強い声色であり、曲調と声が、とても良く合っている。	具体的な形態による表現傾向	線描のみによる四角形。色彩や、スクリブルの自由な動きではなく具体的なイメージを持って表現しているように感じられる。(Cグループ絵画) ４色に塗り分けられた短い棒状の形態。(Aグループ絵画)

Ⅳ. 考察

幼児が描いた絵画表現の内面的世界の特徴について、製作中に幼児が聴いた楽曲の特徴との関係を踏まえて分析し、楽曲が幼児の絵画創作活動に与えた効果について考察する。

「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」の曲が明るいさわやかな曲調、輝かしい音、誰もが心に残る軽妙なメロディであることと、絵画からは彩度の高い色彩が多く使われていることとの相関がある。また、赤色と青色の原色が使われていることや、色が混色されずに描かれていることなども関係している。具体的な形の傾向として人、花、金魚、ハートが表れているが、金魚とハートはともに赤色が使用されていることから、明るい輝かしいイメージが内在した表現である。

「ジュ・トゥ・ヴ」はアウフタクトから流れるような３拍子が特徴となっているが、描かれた線には一定の単位による流れが規則的に描かれているいくつかの箇所が確認できる。比較的短いまとまりのある線や円弧を描くタッチが多く見受けられそれらが拍子を感じさせる表現に近い。線描の勢いにもリズム感がある。Dグループ絵画に描か

れている人の顔は他の３枚にも同様に描かれていることから、曲を聴いて感じ取った表現ではないと推測される。

「リベルタンゴ」の曲は、全体的に、鋭いスタッカートを多用している。情緒的には暗い酒場、フラストレーションの捌け口で踊った曲であり、哀愁漂う激しい曲調である。これらのイメージが幼児の絵画との相関関係は、Ｂグループ絵画中の青色で小さな丸形の集合体と、Ｃグループ右にある紫色と赤色と黄色の丸形の集合体、Ｄグループ絵画右の多色で描かれたハート形の集合体がスタッカートと関連がある。また、すべてのグループに一部黒色が集中して使われている。Ａグループ絵画左とＤグループ左の黒は共に、有彩色の躍動的な線の上にさらに黒色を塗りつぶしている。塗りつぶされた黒色は塊として画面から強い緊張感と線の躍動感がある。幼児が、直接的な暗い酒場や哀愁を感じ取ることはないにしても、曲調やバンドネオンの音色から何らかの感性を感じ取った結果である。

「アイアイ」･「やぎさんゆうびん」の曲は童謡であるので、曲調は単純で明るい。「アイアイ」は、歌詞に繰り返しや、オノマトペがあり、幼児には、受け入れられやすい。さらに、これらの曲は他の調査曲とは異なり幼児が普段聞いているなじみのある曲であることから線描に勢いがあり、興奮して描いている痕跡がある。画面全体に元気よく描かれており余白が少ない。また、暖色系の色が多く使われており、色数が多い。

「ボン・アニベルセ」は、アフリカ音楽でポリリズムである。アフリカ音楽の明るさと、南国ののんびりとした曲調である。アフリカ的な曲調のためか画面全体の色の傾向として茶色の色彩が多く、彩度が低い色が多い。また、単色で描かれている箇所が多い。このことは色の響きや美しさからくる気持ちの表現ではなく、何かの形を表すために単色で描いている。また、Ｃグループ絵画には線描のみによる四角形が描かれている。さらにＡグループ絵画右寄りには、４色に塗り分けられた短い棒状の形態が描かれている。曲から具体的なイメージを感じた表現である。

以上、音楽が子どもの絵画表現に及ぼす内面的世界の諸傾向と特徴について考察してきた。幼児期の子どもの世界は、未分化な精神構造によりスクリブル的な表現が多いが、曲のイメージやリズムなどを自分の内面世界に反映させて―あるいは、取り込んで―心情表象として絵画的表現に置き換えてきた。

このように音楽を聴く行為や絵画表現には、対象者の内面的世界が生まれる。幼児期の子どもにとって音楽を聴き、絵を描くことによって、豊かな感性を育むことができる可能性があるのではないか。乳幼児期の子どもにおける音楽と絵画の可能性に期待したい。

謝辞

本研究の調査にご協力いただきました、Ｍ保育園および園児の皆様に心より感謝申しあげます。

注１：ドードリングとは、大きな模造紙に自由に好きな絵を描き楽しむ遊び。
板野和彦著、「ユニバーサルデザインの音楽表現」、萌文書林、pp.88-89

引用文献

１）槙英子、保育を開く造形表現、萌文書林、2008 年、p.68
２）篠原佳年著、こころとからだのモーツァルトセラピー－癒しと気づき・・・音の処方箋、2002 年４月 27 日　初版発行、p.196
３）鶴岡政子　柴崎亮介　鶴岡百合子　若い学生を対象とした Mozart 音楽効果とスペクトル解析、2014 年東京大学・空間情報科学研究センター　足と歩きの研究所
４）全国大学音楽教育学会　編著、日本の子どもの歌、－唱歌童謡 140 年の歩み、知玄舎、2013 年 p.120
５）櫻林仁著、「音楽療法入門」、芸術現代社、

1980 年、p.233
6）中村健太郎、「音のしくみ」、ナツメ社、2007 年、p.92
7）坪口昌恭、「アフリカ音楽分析」、尚美学園大学芸術情報学部紀要　第６号、p.72
8）佐々木健一、「日本的感性」、中公新書、2010 年、pp. 3-8

栗本浩二　（埼玉東萌短期大学教授）
落合知美　（埼玉東萌短期大学教授）